

氏 名	黒 崎 龍 悟
学位(専攻分野)	博 士 (地域研究)
学 位 記 番 号	地 博 第 61 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	ア ジ ア ・ ア フ リ カ 地 域 研 究 研 究 科 ア フ リ カ 地 域 研 究 専 攻
学 位 論 文 題 目	タンザニア、マテンゴ高地における外部インパクトと内発性の発現過程 に関する研究

論文調査委員 (主 査) 准教授 伊 谷 樹 一 教 授 島 田 周 平 准教授 重 田 眞 義

論 文 内 容 の 要 旨

本論文では、タンザニアの住民が、農村開発に関わるさまざまな外部インパクトを受けとめ、それらを地域社会の抱える課題に向けて応用していく過程を、ある農村開発プロジェクトの事例を通して明らかにしている。

第1章では、農村開発に関連する先行研究をもとに最近の開発理念の動向をたどりながら、上述した本研究の目的を詳述している。国際的な開発理念をアフリカにおける地域社会の実態に照らしながら再評価するとともに、在来と外来の相互作用に焦点をあて、そこから生じる創造的な営為に注目することの必要性を提起した。

調査は、国内有数のコーヒー産地として知られるムビンガ県マテンゴ高地で実施した。第2章では、調査地域の生態的、社会的な特性を概観するとともに、同地域の経済を支えてきたコーヒー産業の情勢を、政策転換や市場価格の変化と対照しながら分析している。1994年にコーヒー流通が自由化されたことで、それまでコーヒー産業を支えてきた協同組合が崩壊したが、それはたんに地域産業の混乱を招いただけでなく、住民にとって国家に擁護された体制からの脱却と経済的な自立を促すものであったことを指摘している。

第3章では、国際社会における開発理念の歴史的な変遷をたどるとともに、近年の開発政策が地域社会に与えてきた影響について論じている。タンザニアでは構造調整計画の導入を機に、地域開発の国際的な潮流に沿って、住民参加を基調とする取り組みが推進されていった。ムビンガ県では、農林畜産業を支援するいくつかの農村開発プロジェクトが実施され、外部支援に農民グループとして取り組む活動体制が定着していった。タンザニア政府も融資の提供を示唆しながら農民グループの結成を促していったが、当初はまだ住民による活動への主体的な参加は見られなかった。

第4章では、開発プロジェクトの活動を通して発現する内発的な動きについて検討している。政府の働きかけによって、ムビンガ県では活動の母体となる農民グループが組織されていったが、そこには依然として公主導の体質が色濃く残っていた。そのような状況のなかで実施された一つの参加型農村開発プロジェクトは、地域経済の安定的な向上と環境保全の両立を目指す活動をサポートしながら、住民主導の意義を強調していった。プロジェクト活動の実質的な成果とグループ活動の意義が広く認知されるのともなう、農民グループは自ら活動を構想、実践する外向的な組織として位置づけられるようになっていった。こうした動きは、外部支援への依存体質から脱却し、外部インパクトを社会内部に取り込んで等身大の活動を展開しようとする体制への転換を意味していた。

こうした内発的な動きは、プロジェクト終了後に結成された農民グループ協議会の活動にも顕著にあらわれている。第5章では、農民グループ協議会が、地域社会の平等規範に従いながら、新たな試みを積極的に取り入れ、住民がそれに等しくアクセスできる仕組みを明らかにしている。

第6章では、住民による外部支援の受けとめ方の変化について、農民グループが実践した水道敷設の事例をもとに論じている。公共事業が農民グループによって実施された背景には、外部支援に対する住民の意識に「与えられるもの」から「獲得するもの」への転換があったことを指摘している。

第7章では、タンザニアにおける内発的発展のあり方について考察した。政策の転換やグローバル化によって住民の経済的な自立が迫られるなか、当該地域の住民は、外部からの支援や情報を取り入れて、社会規範との調和をはかりながら地域のニーズに沿った活動を展開していった。その背景には、支援に対する受動的な姿勢から、住民主導の取り組みに対して外部の諸要素を積極的に活用しようとする姿勢への意識転換があった。こうした経験を地域社会が共有することで、地域の在来性に根ざした内発的な活動が促されると結論している。

論文審査の結果の要旨

タンザニア南部のムビンガ県を居住域とするマテンゴは、1920年代に導入されたコーヒーを生計の基盤としてきた。コーヒーは長年にわたってタンザニアの経済を支えてきた重要な商品作物であり、国内有数の産地である同県は経済的に重要な地域と見なされ、1990年頃からさまざまな農村開発が実施されてきた。本論文では、マテンゴ社会を対象としながら、外部インパクトに対する住民と外部アクターとの相互作用に着目し、地域社会が抱える課題に対する住民の内発的な動きを多角的に分析することを目的としている。

本研究の特徴は、申請者がムビンガ県農業省に普及員として在職しながら、外部機関が実施する農村開発プロジェクトに関与し、自ら農村に暮らしてプロジェクトの影響や農村社会内部の反応を支援側と住民側の双方の立場から捉えたことにある。この研究は、今日の農村社会のより包括的な理解を促すと同時に、今後の農村開発のあり方を構想するうえで、いくつかの重要な指針を提示しており、学術的に高い価値がある。

本論文ではまず、国際的な開発理念をアフリカにおける地域社会の実態に照らしながら再評価するとともに、在来と外来の相互作用から生じる創造的な営為に注目することの必要性を提起している。そして調査地域の経済を支えてきたコーヒー産業の情勢を、タンザニアの政策転換や市場価格の変化と対照しながら分析した。経済の自由化にともなう協同組合の崩壊が、たんに地域産業の混乱を招いただけでなく、住民にとって国家に擁護された体制からの脱却と経済的な自立を促すものであったことを指摘している。

ムビンガ県で実施された一つの参加型農村開発プロジェクトは、地域経済の安定的な向上と環境保全の両立を目指す活動をサポートしながら、住民主導の意義を強調していった。活動の実質的な成果が住民に認知されるにつれ、農民グループは自ら活動を構想、実践する外向的な組織として位置づけられるようになっていった。この動きは、外部支援への依存体質から脱却し、外部インパクトを社会内部に取り込んで等身大の活動を展開しようとする住民の意識転換であり、そのプロセスを詳細に記録し、分析した意義はきわめて大きい。

こうした内発的な動きは、プロジェクト終了後に結成された農民グループ協議会の活動に顕著にあらわれている。協議会は新たな試みを積極的に取り入れ、地域社会の平等規範に従いながら、それに住民が等しくアクセスできる仕組みとして機能していることを明らかにした。さらに論文では、住民による外部支援の受けとめ方の変化について、農民グループが実践した水道敷設の事例をもとに論及し、外部支援に対する住民の意識が「与えられるもの」から「獲得するもの」へと変化したことを指摘している。

政策の転換やグローバル化によって住民の経済的な自立が迫られるなか、当該地域の住民は、外部からの支援や情報を取り入れて、社会規範との調和をはかりながら地域のニーズに沿った活動を展開していった。その背景には、支援に対する受動的な姿勢から、外部の諸要素を積極的に取り込み、活用しようとする姿勢への意識転換があり、こうした活動の経験を地域社会が共有することで、地域の在来性に根ざした内発的な活動が発現すると結論している。申請者が社会内部の反応を分析しえたのは、プロジェクト活動に対する従来の量的な評価手法では十分に把握できなかった、外部インパクトの間接的な影響や副次的な効果を捉えることができたためであり、本論文は地域研究の実践的な応用の可能性を示したものとして高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものとして認める。また、平成20年1月28日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。